

コラム

《腰折れ文》七、

渡邊澄子（会員）

えっ！ あの子、もう七十二歳になるの？ あの子とは吉永小百合のことだ。教師になつてなるつもりなど全くなかったのに、始めは高校教師。吉永小百合はそのときの「教え子」だった。と言っても既にスクリーンの花形だったので登校はめったになく卒業不可。頭のいい彼女は何とか言う大学受験資格試験合格で早稲田入学を果たした。以後の活躍ぶりは皆さんご存じの通り。ライフワークとして続けられていた原爆詩の朗読に感動して、原爆問題を広く知るところで朗読はさらに味深くなるだろうと、原爆文学論の拙著に手紙を添えて送ったのはもう十数年以上も前のことになる。彼女からは感謝と原爆詩朗読の覚悟を丁寧に述べた手書きの返事がきた。人格においても優れた俳

優である。こんなことを思い出したのは「東京新聞」（一月一日）の一面全面にわたつての百二十本目の出演映画「北の桜守」紹介記事を読んだ事による。この映画の舞台は本協会企画のツアーに参加して行った樺太（もう一度行きたい）で、「戦後の大変な時期を必死で生きてきた人たちのことを、映画で残すことができたのが、女優としてうれしい」、「戦争を二度と起こさないために、少し意味があることができたかなと思います。忘れてはいけないことがあると、改めて感じました」の彼女のコメントからも広義の反戦映画らしい。三月の公開を待つて観に行くつもり。待ちどおしい。吉永小百合出演映画の全面紹介の裏面は平田オリザと斎藤美奈子の「新春対談」が占めていた。

明治維新から百五十年の現代を「言葉とコミュニケーション」「教育と創造性」「地方の魅力づくり」から検証した対談だが、驢尾に付せるような発言の期待は裏切られた。呆然、愕然させられたのは、阪大生が一年間に読んだ小説は一冊と言う学生が一番多く、ゼロもいたという現実が語られていたことである。まさかそこまで来ているとは知らなかった。自分の首が絞められているのにはほんと「一強独裁」政治を支持する理由が分かったような気がしたが、「愛国者」の私は絶望感に打ちひしがれた。

高校時代、特にロシア文学と中国文学にのめり込んだ時期があった。明日は物理の試験がある日だったので勉強しなければならなかったのに、読みかけた小説を中断できず、徹夜して読書にふけてしまった。翌日、どうしようかと友達に相談したら、両隣の友人からカンニングを勧められた。三問のうち、一問はわかったが他の二問が分からな

い。友達が見やすいように試験用紙をそつと寄せてくれた。困ったことに二人の答えが違ふのだ。どっちが正解か判断できない。えいっと白紙で出した。翌日、呼び出されて理由をきかれた。新卒の男の教師だった。私は、「人生不可解」と人生問題に悩んでいると答えた。先生から今週の日曜日宿直だから話しに来いと言われ、行った。彼は優しく誰もが通る青春の悩みを語り阿部次郎の『三太郎の日記』を貸してくれた。白紙を出した私の物理は優だった。古き良き時代のお話し。今の学生は何を抛り所にして生きているのだろう。電車で七人のうち六人がスマホに夢中だ。覗いて見ると私には理解不能なマンガみたいだ。福島原発事故は未だに未解決で「レベル7」風化の危機感、専守防衛を骨抜きにする「航空母艦」保有問題、原因究明なく異常事態が日常化の沖縄、核兵器禁止条約に不参加の日本政府等々、喫緊・重要課題が山積しているのに。ああ、苛つく。